

公共社会学は何をめざすか

——グローバル化する世界の中で——

日本社会学会会長 盛山和夫

昨年、人文社会系学部の改組・廃止を求めた通達が文部科学省から出されたとして、大きな騒ぎになりました。その後、それは誤解だということになりましたが、国立大学における人文社会系を取り巻く状況に厳しいものがあることには変わりはないようです。じつは、似たような問題状況が欧米でもあるという話もいろいろと聞こえてきます。

誰もが漠然と感じているように、これらの背景には、日本や欧米のような低成長下で政府財政が厳しい中、経済界や財政当局あるいは議会などからの「実用的ではない（と思われる）学問を財政的に支援することへの疑問や批判」があります。むろんこれに対しては、純粋に学術の立場から「学問は、何か目に見える形で＜役に立っている＞かではなく、＜真理＞の探求にこそその意義がある」と反論することが必要ですし、それは絶対に譲ることはできません。

しかしその一方で私は、「人文社会系の学問には極めて大きな社会的意義があるにもかかわらず、そのことが世間のもとより当の研究者自身にも十分には理解されたり自覚されたりしていない」ことに大きな問題があると考えています。ただし、一口に人文社会系といっても法学や経済学などのようにもとから実用の学であるものもありますから、焦点は当然、哲学や文学のような純粋人文学になります。そうした中で、ある場合には哲学のように超越的で達観した議論を展開する一方で、他方で貧困やマイノリティや社会福祉あるいは災害などの分野を中心に極めて実践的な研究と議論を展開しているという両面性をもっているのが、われわれの社会学という学問です。

じつは、19世紀後半における社会学の成立、19世紀末から20世紀初頭にかけての社会学の興隆、戦後から1960年代までの社会学の発展、1970年代からのさまざまな革新の試み、そして、そうした昔から今日にいたるまで、社会学の研究を生涯の仕事として選択した人びとが社会学に感じていた魅力の根源にあるのは、まさにそうした両面性にあると私は考えています。つまり、そもそも社会とは何かといった根源的な問いへの探求を継承して深めていきながら、それぞれの時代の社会において立ち現れるさまざまな問題を鋭敏な感覚で受け止め、そこから時代や社会を理解しつつ批判的に解明し、その上でさらに具体的な争点や課題に対して実践的に向き合っていくという社会学の特性です。

ここにおいて人文学系の学問と社会学とに共通する重要な社会的な意義が現れていると私は思います。それは、社会がそもそも共同の意味理解からなっているところから、そうした共同の意味理解に関して、その批判や再解釈を通じて新たな共同的理解の可能性を切り拓いていくというまさに社会そのものの根源的な再構築に携わっているということです。こうした探求の社会的意義は言うまでもないことだと思います。

今日の世界はグローバル化が進展する中でさまざまな対立や不正義や混乱が噴出しており、グローバルにもまたローカルにもいかにして新しい共同性を構築するかという、かつて産業化の進展の中で社会学が担ったのと平行な問題状況が生まれています。公共社会学は、現実の諸問題に対して鋭く学術的に切り込んでいる社会学のさまざまな探求を基盤にしながら、よりよい共同性の構想への探求に志向しています。